

- 問1 弥生時代、稲作の普及によって余剰生産物が生まれると、富を蓄えた有力者が現れ、各地に小規模な政治集団である「国」が形成されました。当時の倭（日本）の有力な王は、中国の王朝から自らの地位を正式に認められることで、周辺諸国に対する権威を高めようとしてしました。西暦57年に、倭の「奴国」の王が中国の後漢の皇帝から授かった、その地位を証明するための品物として正しいものを選びなさい。（2018年 神奈川県公立入試 類似）
1. 仏像や経典
 2. 三角縁神獣鏡
 3. 「漢委奴国王」と刻まれた金印
 4. 稲荷山古墳から出土した鉄剣
- 問2 弥生時代における「青銅器」と「鉄器」の使われ方の違いについて説明した文として、最も適切なものはどれですか。（2016年 大阪府公立入試 類似）
1. 鉄器も青銅器も、ともに稲作を効率化するための農具としてのみ、実用的に普及した。
 2. 青銅器は武器や農具などの実用的な道具として用いられ、鉄器は祭りや儀式のための宝物として用いられた。
 3. 鉄器は縄文時代から日本列島で独自に作られていたが、青銅器は弥生時代になって初めて大陸から伝わった。
 4. 鉄器は武器や農具などの実用的な道具として用いられ、青銅器は祭りや儀式のための宝物として用いられた。
- 問3 弥生時代に大陸から伝えられた金属器のうち、銅鐸や銅剣などの青銅器は、主にどのような目的で使用されていたと考えられますか。（2019年 徳島県公立入試 類似）
1. 都の東西に置かれた市で、布や米と交換される通貨として用いられた
 2. 食物を煮炊きしたり、貯蔵したりするための生活容器として用いられた
 3. 土地を耕したり木を加工したりする実用的な工具として用いられた
 4. 集団の祭祀や祭りの道具として用いられた
- 問4 弥生時代、土を耕すための農具や敵と戦うための武器には、青銅ではなく主に「鉄」が材料として選ばれました。このように鉄器が実用品として普及した理由として、最も適切な説明はどれですか。（2018年 大阪府公立入試 類似）
1. 鉄は青銅に比べて硬度が高く耐久性に優れていたため、衝撃の加わる作業や戦闘に適していたから。
 2. 青銅は非常に重く持ち運びが困難だったため、軽量の鉄が実用的な道具として好まれたから。
 3. 鉄は青銅よりも融点が低く、当時の未熟な技術でも簡単に大量生産することができたから。
 4. 鉄は日本列島で独自に発見された金属であり、大陸から輸入する必要があった青銅よりも安価だったから。
- 問5 1世紀半ばの日本（倭）において、九州にあった奴国の王が中国の王朝に使者を送り、皇帝から金印を授けられたという記録が中国の歴史書に残されています。このとき、奴国の王に金印を授けた中国の王朝として正しいものを次の中から選びなさい。（2026年 山口県公立入試 類似）
1. 漢
 2. 隋
 3. 魏
 4. 秦
- 問6 奈良県などの古墳から出土する銅鏡などの考古資料は、当時の中国の王朝から邪馬台国の女王へ贈られたものである可能性が検討されています。中国の歴史書には、卑弥呼が「親魏倭王」の称号とともに百枚の銅鏡を授かったという記述がありますが、このとき外交関係を結んでいた中国の王朝名を答えなさい。（2021年 奈良県公立入試 類似）
1. 唐
 2. 隋
 3. 秦
 4. 魏
- 問7 中国の歴史書には、紀元前1世紀頃から1世紀頃にかけての倭（日本）の様子が記されています。これらの記述についてまとめた次の説明のうち、最も適切なものはどれですか。（2023年 大分県公立入試 類似）
1. 『漢書』地理志には、奴国の王が後漢の光武帝から金印を授かり、中国との交流を深めたことが記されている。
 2. 『後漢書』東夷伝には、卑弥呼が30余りの国を従え、魏の皇帝から「親魏倭王」の称号を授かったことが記されている。
 3. 『魏志』倭人伝には、倭の王が初めて中国の皇帝に朝貢し、大陸の進んだ青銅器文化を日本へ持ち帰ったことが記されている。
 4. 『漢書』地理志には、倭人が100余りの国に分かれて生活し、定期的に朝鮮半島の楽浪郡へ使節を送っていたことが記されている。
- 問8 大陸から伝わった稲作が日本各地に広まったことは、当時の社会のあり方に大きな変化をもたらしました。収穫物の貯蔵という観点から、稲作の普及が社会に与えた影響として最も適切な説明を選びなさい。（2023年 神奈川県公立入試 類似）
1. 収穫した稲を加工するために、鉄器よりも先に漢字が伝来し、役所による管理体制が全国で確立した。
 2. 収穫物を平等に分配する仕組みが完成したため、ムラ同士の争いは完全になくなり平和な社会が実現した。
 3. 食料を保存する必要がなくなったため、人々は定住をやめて獲物を追いかける移動生活へと戻った。
 4. 収穫したコメを富として蓄えることが可能になったため、蓄えの多寡による貧富の差や身分の違いが生まれた。
- 問9 日本列島と朝鮮半島の位置関係を示した地図において、九州地方の北部（現在の佐賀県付近）に位置し、大陸との交流や当時の防御の様子を今に伝える弥生時代の代表的な遺跡はどれか、選びなさい。（2020年 和歌山県公立入試 類似）
1. 岩宿遺跡
 2. 三内丸山遺跡
 3. 登呂遺跡
 4. 吉野ヶ里遺跡
- 問10 弥生時代の社会や文化について述べた次の文のうち、近畿地方を中心に分布する青銅器である「銅鐸」の特徴や背景を説明したものとして最も適切なものはどれか。（2020年 大分県公立入試 類似）
1. 実用的な武器として使われたのち、次第に祭祀用へと変化したもので、九州地方北部で多く出土する。
 2. 死者を埋葬する際に副葬品として納められた装飾品で、魔除けなどの意味を持っていた。
 3. 古墳の墳丘に並べられた焼き物であり、葬られた王の権威を示したり聖域を区切ったりする役割があった。
 4. 稲作の豊作を願う祭りの道具として使われ、表面には当時の人々の生活の様子が描かれることもあった。
- 問11 3世紀の中国の歴史書において、邪馬台国の女王卑弥呼が30ほどの小国を従え、倭の王として交流したことが記されている当時の中国の王朝名を答えなさい。（2023年 山形県公立入試 類似）
1. 漢
 2. 魏
 3. 隋
 4. 秦
- 問12 弥生文化を形成した「弥生人」の成り立ちや、その文化の特徴について説明したものとして正しいものはどれですか。（2022年 愛媛県公立入試 類似）
1. 大陸からの渡来人と在来の人々が混ざり合うことで形成され、稲作を基礎とした定住社会を発展させた。
 2. 武士が政治の実権を握り、幕府という組織を通じて全国の守護や地頭を統制する封建的な社会を構築した。
 3. 遣隋使や遣唐使を通じて大陸の律令制度を積極的に学び、天皇を中心とした中央集権的な法治国家を築いた。
 4. 縄文土器を使用し、弓矢を用いた狩猟や貝塚に見られる採集を中心とした、身分差のない平等な社会を維持した。

答え合わせ・解説

問1	答え 3 「漢委奴国王」と刻まれた金印	稲作が広まった弥生時代には、食料の蓄えや土地を巡って「争い」が起きようになり、集団を統合するリーダー、つまり「王」が現れました。当時の中国の歴史書である『後漢書』東夷伝には、倭の奴国の王が後漢の光武帝に使いを送り、金印を授かったことが記されています。この金印は江戸時代に現在の福岡県（志賀島）で発見されており、当時の日本が中国の王朝と外交関係を持っていたことを裏付ける重要な資料です。
問2	答え 4 鉄器は武器や農具などの実用的な道具として用いられ、青銅器は祭りや儀式のための宝物として用いられた。	弥生時代に伝来した二種類の金属器は、硬度の違いによって用途が明確に分かれていました。鉄は非常に硬く、鋭い刃先を保つことができるため実用具に向いていました。一方、青銅は鉄に比べると脆いものの、鑄造が容易で美しい光沢を持つため、銅鏡や銅鐸、銅剣といった祭祀（まつり）や権威を示すための道具として利用されました。
問3	答え 4 集団の祭祀や祭りの道具として用いられた	弥生時代に鉄器とともに大陸から伝わった青銅器は、鉄器が武器や工具として実用的に使われたのに対し、銅鐸や銅剣などは音を鳴らしたり飾ったりする祭礼用の道具として用いられました。稲作の普及にとともに、豊作を祈るなどの集団の儀式が重要になった背景があります。なお、食物を煮炊きする道具としては、この時代は弥生土器が、のちの時代には須恵器などが用いられました。
問4	答え 1 鉄は青銅に比べて硬度が高く耐久性に優れていたため、衝撃の加わる作業や戦闘に適していたから。	鉄は青銅に比べて非常に硬く、刃先を鋭く研ぐことができるため、木を伐採したり土を掘り起こしたりする農具、あるいは高い殺傷能力が求められる武器に最適でした。対して青銅は、鉄に比べると柔らかく脆いため、激しい衝撃が加わる実用的な道具には不向きであり、主に祭祀用の道具（祭具）としてその価値を見出されました。
問5	答え 1 漢	中国の歴史書である『後漢書』東夷伝には、西暦57年に倭の奴国の王が使者を送り、光武帝から印綬（金印）を授かったことが記されています。この金印は、江戸時代に福岡県の志賀島で発見された「漢委奴国王」の文字が刻まれたものと一致すると考えられています。設問にある1世紀という時期は、中国では漢（後漢）の時代にあたります。
問6	答え 4 魏	当時の邪馬台国と中国との関係は、歴史書などの文字資料だけでなく、出土した銅鏡などの物的な資料からも研究されています。卑弥呼が使いを送った魏という国は、当時の日本（倭）に対してその権威を認める証として鏡や金印を与えました。出土した銅鏡と文献の記述を照らし合わせることで、当時の東アジアにおける交流の実態や、日本列島における国家形成の過程が明らかにされようとしています。
問7	答え 4 『漢書』地理志には、倭人が100余りの国に分かれて生活し、定期的に朝鮮半島の楽浪郡へ使節を送っていたことが記されている。	紀元前1世紀頃の日本の様子は、前漢の歴史を記した『漢書』地理志に「倭人は100余りの国に分かれていた」と記録されています。一方、1世紀半ば（紀元57年）に奴国の王が金印を授かった記録は『後漢書』東夷伝に、3世紀の卑弥呼に関する記録は『魏志』倭人伝（『三国志』の一部）に記されており、書物と時代・内容を正しく区別する必要があります。
問8	答え 4 収穫したコメを富として蓄えることが可能になったため、蓄えの多寡による貧富の差や身分の違いが生まれた。	稲作によって食料の安定的な確保が可能になりましたが、同時に収穫したコメを貯蔵できるようになったことで、それが「富」としての価値を持つようになりました。これにより、多くのコメを持つ者と持たざる者の間で貧富の差が生まれ、さらに水や土地を巡るムラ同士の争いが発生し、社会の階層化が進む要因となりました。
問9	答え 4 吉野ヶ里遺跡	弥生時代に現在の佐賀県に築かれた、大規模な環壕集落（かんごうしゅうらく）の跡です。物見やぐらや二重の濠、大規模な墳丘墓などが発見されており、クニの成立過程や大陸との交流を研究する上で極めて重要な遺跡です。静岡県登呂遺跡や青森県三内丸山遺跡とは所在地や時代、特徴が異なります。
問10	答え 4 稲作の豊作を願う祭りの道具として使われ、表面には当時の人々の生活の様子が描かれることもあった。	銅鐸は、弥生時代の人々にとって極めて重要であった稲作の祭礼に深く関わっています。表面に描かれた鹿を狩る様子や、高床倉庫、脱穀する人々の姿などの絵画資料は、文字を持たなかった当時の社会を知るための貴重な手がかりとなっています。なお、九州北部で多く見られるのは銅剣や銅矛であり、銅鐸とは分布域が異なります。
問11	答え 2 魏	3世紀前半の日本（倭）の様子を伝える『魏志倭人伝』は、中国の三国時代における王朝の一つである「魏」の歴史書です。この書物には、邪馬台国の卑弥呼が魏に使いを送り、皇帝から「親魏倭王」の称号や金印、銅鏡などを授かったことが詳しく記されています。選択肢にある漢は紀元前後の、隋は6世紀末からの王朝であり、時代が異なります。
問12	答え 1 大陸からの渡来人と在来の人々が混ざり合うことで形成され、稲作を基礎とした定住社会を発展させた。	弥生時代は、ユーラシア大陸から九州北部などに渡来した人々と、日本列島の在来の人々が交流・混血することで「弥生人」としての特徴が形づくられた時期です。彼らがもたらした稲作技術は、それまでの狩猟・採集中心の生活を大きく変え、計画的な食料生産を可能にしました。これにより人口が増加し、階級社会や国家の形成へとつながる弥生文化が確立されました。